

次世代の持続可能な 交通まちづくり

Auto Sapiensの新世界？

太田勝敏 Katsutoshi OHTA



東京大学名誉教授

今、私たちは大いなる交通革新期に入っている。ICTの技術革新が自動車交通分野に及び、“自動車依存社会”の諸課題を超越した新たな交通社会が展開し始めている。電動で、他のクルマ、交通インフラ、そして社会と常につながった自動運転の次世代EV車がその核心である。これは従来の機械式自動車から知能を持ち、考えるクルマへの進化である。現生人類の進化になぞらえて、今後われわれの社会を大きく変えていくであろうこの次世代車をAuto Sapiens (AS車)と呼びたいと思う。

このような進化は、特別な運転技能がなくても、子ども・高齢者・障がい者でも使用可能な移動手段の誕生を意味している。AS車は究極的には、有能な運転手兼秘書付きの専用自動車が24時間いつでも使える状態で待機している状況と理解される。AS車により運転ミスによる交通事故がなくなり、環境・地球温暖化の問題も大幅に改善されよう。また、信号交差点は不要となり、既存の道路施設でも大量の交通流を安全で円滑に収容できよう。都市内の移動はほぼAS車で済ませることができるため、その個人所有は不要でシェアが基本となろう。個人所有は移動機能以外の役割、例えば私的空間機能（第二の書斎、趣味や休息の場所など）、防災設備（シェルター）、そして運転・移動を楽しむ道具やライフスタイルやステータスのシンボル・ファッションとしての機能など、多様な利用・所有価値を見出す場合となろう。

このようなAS車が普及するにつれて交通分野だけではなく、新しいライフスタイル、ビジネススタイルもおのずと生まれてこよう。交通面では家族の送迎交通をはじめ、タクシーやバスなどの公共交通、宅配便などのサービスはA

S車に代わり、現在1台当たり2、3台以上あるとされる駐車場は、AS車の自動倉庫・充電・整備基地に集約されよう。個別の駐車スペースが不要となれば住宅や施設の建築形態も大きく変わるであろう。人口減少と超高齢化が進むわが国の場合、AS車が提供する新たなモビリティは“賢い縮退”の形態についてもコンパクトシティだけでない選択肢を提供するであろう。AS車が普及すれば多くの都市街路は、歩行者や自転車を中心としたシェアードスペースとして緑の多いスロークライフの公共空間となり、次世代コミュニティの拠点施設となろう。

しかし、AS車の進化に合わせて社会の仕組みを変革できるかは、原発事故で見のようにリスクも大きい。先進技術と人間社会とのすり合わせには思わぬ障害も多い。自然災害、ハッキング・テロなどの人為的破壊・事故などにより、安定的なシステム管理・継続ができなくなるといったリスクである。また、AS車システムが格差社会の中で、どこまで平等に市民全体に利用可能なものとなり得るか、費用面が大きな課題である。

いずれにしても、AS車の開発と普及には今後30～50年といった移行期間が必要であり、10年先は普及開始期で、在来型自動車と既存の道路インフラを共用することになろう。このようにさまざまな課題があるが、新たな交通社会を切り拓くものとして、その進化を構想することは楽しい挑戦である。

1965年東京大学工学部卒業、67年修士、67～71年ハーバード大学GSAS (Ph.D.)。東京大学都市工学科、東洋大学国際地域学部にて教職。専門は都市交通計画、「持続可能な交通まちづくり」がテーマ。学部生時代にIAESTE JAPAN国際学生技術研修協会を設立、現在理事長。（理事／1981年会員就任）